

中高年男女の孤独感

—配偶関係、孤立に着目して—

大風 薫

(京都ノートルダム女子大学 現代人間学部)

【要旨】

中高年男女を対象として、配偶関係と孤立に着目して孤独感とその規定要因を明らかにすることを目的として研究を行った。分析の結果、孤独感をより強く感じているのは男女ともに離別者であるが、男性のほうが配偶関係と孤独感との関連が強かった。女性は男性よりも家族や家族以外に頼れる相手が多く、他者と交流している頻度も高かった。

孤独感を高める要因は、配偶関係（離死別が有配偶・未婚継続者・死別者よりも孤独感が高い）、単独世帯であること、健康状態が良くないこと、家族あるいは家族外の人との交流頻度が低いことである。また自身の介護を頼れる人がいないことは孤独感を高めていた。

女性のみ分析では、介護が必要な家族がいることが孤独感を高め、家族や家族外との交流に加えて友人との交流頻度が高いと孤独感は低かった。無配偶者では母親のみ健在である場合や近隣の人々との交流頻度が高いと孤独感は低かった。

孤独感は心身の健康に影響を及ぼす。長寿化の進行とともに、離婚や非婚によって家族を解体したり、家族形成ができない人々が増加している。孤独感の規定要因について、年齢やライフコースの違いに注目しながら研究を進める必要がある。

キーワード：孤独感、孤立、配偶関係、ライフコース、ネットワーク、介護経験

1. はじめに

孤独感とは社会関係における個人の希望と実際に得られる量・質の間にあるギャップに対する主観的・否定的な反応(De Jong-Gilverveld et al., 2006)、個人の社会的なネットワークが量的あるいは質的に不足している際に生じる好ましくない経験(Perlman & Peplau, 1981)である。ネットワークの欠如といった客観的な状態としての「社会的孤立」とは異なる概念であり、一般的に、社会的に孤立していると孤独感は高くなる。孤独感健康上の問題や心理・精神的な問題を引き起こす(カシオッポ & パトリック, 2010)。

関係をもつ人々が多ければ必ずしも孤独感が低下するわけではなく、規模は重要ではあるものの、ネットワークの構造や機能など、ネットワークの量的側面以外の要因も孤独感に関わってくる(De Jong-Gilverveld et al., 2006)。たとえば Van Tilburg(1990)は、強い関係の人々のみで構成されるネットワークよりも、強い関係と弱い関係の人々によって構成されるネットワークのほうが孤独感を低減させやすいとする。家族・親族のみで構成されるネットワークよりも、家族・親族ネットワークと家族・親族外ネットワークによって構成され

る多様なネットワークのほうが孤独感を低下させる(Silverstein & Chen, 1996)。育児についても、疎らすぎず、緊密過ぎない中庸なネットワークが不安度を低下させるように(松田 2008)、ネットワークはサイズ、構造、機能の面から検討する必要がある(De Jong-Gilverveld et al., 2006)。

孤独感の広がり、縦断調査の分析によって明らかになってきている。Dykstra et al.(2005)は、高齢期の人々の孤独感を7年間追跡したところ、70%の人々においては孤独感に変化がなく、10%から13%の人々は減少したが、11%から18%の人々は上昇することを見出し、時間の経過に伴い、年長の人々がより孤独感を抱きやすく、孤独感の上昇は最も年長の人々に高くみられるとした。

社会構造要因における孤独感の規定要因は、遠因として、デモグラフィック・社会構造要因(年齢、ジェンダー、教育水準、仕事、収入、健康など)、近因として、個人のネットワークのサイズ・構造・機能などの社会統合の水準(家族、知り合い、同僚、隣人など)がある(Hawkley et al., 2008)。Takagi & Saito (2015)は、成人子と同居する高齢者は配偶者がいないと孤独感が高く、また日常生活に困難を抱えるほど、健康状態に対する自己評価が良くないほど孤独感が高いこと、成人子と別居する高齢者は自身の健康状態が悪いと孤独感が高いが、成人子との対面でのコンタクトが多いほど孤独感が低くなることを明らかにしている。単身高齢者における孤独感の規定要因を検討した下開(2005)は、子どもがいない、活動能力が低い人で孤独感が高いが、性別、年齢、仕事の有無、住居形態、一人暮らしの年数は孤独感との関係がみられないことを明らかにした。孤独感を規定する要因については、分析対象者や分析対象地域によって違いがみられるようである。

現代の日本では人々のライフコースが多様化し、50歳時点未婚者が増加傾向にあることや¹、単独世帯の増加²が示すように、家族とのつながりを持ちにくい人が増加している。サポート源としての家族を持たない人々は孤立しやすく、孤独感を抱きやすい。特に家族資源として配偶者の有無は孤立や孤独に関連する重要な要因と考えられる。また孤独や孤立には年齢の影響も大きい。以上を踏まえて本稿は、40歳以上の中高年を分析対象として、配偶関係によるサポート源の違いを検討しながら、孤独感の規定要因を明らかにすることを目的とする。

2. 分析対象・分析方法

本研究で使用したデータは、日本家族社会学会・NFRJ研究会が企画・実施した調査デー

¹ 日本人男性の生涯未婚率は23.4%、女性で14.1%と1990年以降大きく上昇する傾向にある。この拡大傾向は今後も続き、2030年時点の予想は男性28.0%、女性18.5%で、未婚が珍しくなくなった世代が高齢期に入ると65歳以上の未婚率が大幅に上昇すると見込まれる(国立社会保障・人口問題研究所 2018)。規模においても2015年の35-54歳男性未婚者は474万人、女性未婚者は302万人で、2010年に比べて男性が約24万人、女性は約36万人増加している(総務省 2017)

² 2015年時点の単独世帯は16.7百万世帯(構成比34.5%)であり、今後も増加すると見込まれている(国立社会保障・人口問題研究所(2018)「日本の世帯数の将来推計(全国推計)」)。

タ NFRJ18(Ver.2)を使用している。分析対象は 40 代以上の男女である。サンプルサイズは 2324、男性 1098、女性 1226 である。ただし変数によっては欠損値があるため、サンプルサイズは各分析の結果を参照されたい。分析対象の年代と配偶関係は表 1 の通りである。

配偶関係はライフコースの違いを詳細に検討するため「初婚継続有配偶」「再婚有配偶」「離別後無配偶」「死別後無配偶」「未婚継続」の 5 カテゴリーに分類している³。いずれの年代も「初婚継続有配偶」の割合が大きい、年代によって構成比は異なる。未婚継続者は若い世代に多く、死別者は年代が高くなると多くなる。

分析対象者の平均年齢は男性 56.2 歳、女性 55.9 歳で男女差はない。学歴は男性で「大学・大学院卒」が 36.7%、「高校卒」41.6%、「専門学校・短大・高専卒」15.6%である。女性は「大学・大学院卒」14.4%、「高校卒」43.0%、「専門学校・短大・高専卒」35.7%である。

分析は、クロス分析によって配偶関係と孤独感、孤立との関連を中心に検討したのち、重回帰分析によって孤独感の規定要因を明らかにしていく。

表 1 分析対象者

		初婚継続 有配偶	再婚有配偶	離別後 無配偶	死別後 無配偶	未婚継続
男性	40代 (N=350)	63.4%	4.6%	6.0%	0.0%	26.0%
	50代 (N=315)	69.5%	5.4%	7.6%	0.6%	16.5%
	60代 (N=309)	80.6%	3.2%	6.8%	1.9%	7.1%
	70代 (N=124)	79.8%	6.5%	6.5%	2.4%	4.8%
女性	40代 (N=401)	69.8%	6.2%	9.7%	1.0%	13.0%
	50代 (N=344)	76.5%	2.0%	10.2%	2.9%	8.4%
	60代 (N=344)	72.4%	4.4%	9.6%	9.0%	4.7%
	70代 (N=137)	70.1%	2.9%	6.6%	19.7%	0.7%

3. 配偶関係と孤独感・孤立

3.1 配偶関係と孤独感

図 1 は配偶関係別の孤独感を示したものである。孤独感は「自分は孤独だと感じたこと」を 4 件法で尋ねており、点数が高いほど孤独感が高いことを表す⁴。男性は女性に比べて孤

³ 死別後に再婚したサンプルも存在するが、サンプルサイズが極めて小さいため、分析対象からは外している。

⁴ 孤独感は何 20(エ)この 1 カ月ほどの間に、あなたは次のようなこと(「自分は孤独だと感じたこと」)がどのくらいありましたかについて、1 何度もあった、2 ときどきあった、3 ごくまれにあった、4 まったくなかったを選択肢としている。孤独感の点数は値が大きくなるほど孤独感が高くなるように反転させた。

独感が高い。また男女双方とも離別後無配偶者の孤独感が高く、未婚継続者と死別後無配偶者の孤独感も有配偶者より高い。ただし、のちに掲載する表2で示すように男性死別後無配偶者のサンプルサイズが11と小さいことに留意する必要がある。有配偶者では、初婚継続者と再婚者の孤独感に違いはない。

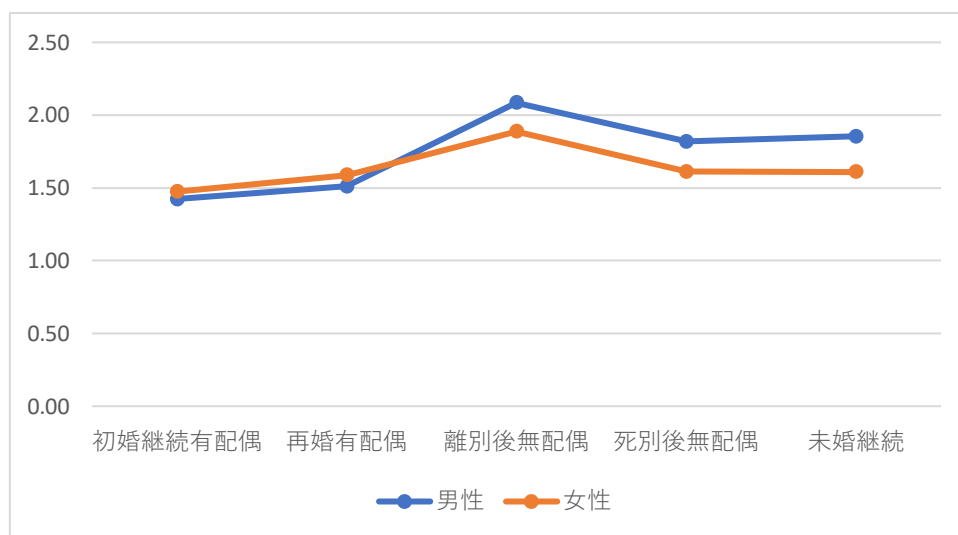


図 1 配偶関係と孤独感

表2は図1で示した結果の割合を示したものである。男性で「何度もあった」割合は未婚者でもっとも高く、女性では離死別無配偶者が高い。男女ともに有配偶者では孤独感が「まったくなかった」と回答する割合が7割を超えていた。

表 2 配偶関係と孤独感の回答内訳

		何度も あった	ときどき あった	ごくまれに あった	まったく なかった
男性	初婚継続有配偶 (N=779)	3.7%	6.5%	18.1%	71.6%
	再婚有配偶 (N=47)	4.3%	10.6%	17.0%	68.1%
	離別後無配偶 (N=71)	9.9%	28.2%	22.5%	39.4%
	死別後無配偶 (N=11)	0.0%	36.4%	9.1%	54.5%
	未婚継続 (N=165)	12.7%	12.7%	21.8%	52.7%
女性	初婚継続有配偶 (N=877)	4.2%	10.0%	14.7%	71.0%
	再婚有配偶 (N=51)	3.9%	13.7%	19.6%	62.7%
	離別後無配偶 (N=115)	11.3%	20.0%	14.8%	53.9%
	死別後無配偶 (N=72)	8.3%	9.7%	16.7%	65.3%
	未婚継続 (N=95)	6.3%	8.4%	25.3%	60.0%

男性： $\chi^2=85.2(12)$, $p<.001$ 女性： $\chi^2=34.0(12)$, $p<.001$

3.2 配偶関係と頼りにする相手

問題が生じたときにどのような人や機関を頼りにするかについて分析した結果を表 3 に示す⁵。問題が生じる状況は「問題を抱えて、落ち込んだり、混乱したとき（情緒と表記）」「急いでお金（30 万円程度）を借りなければならないとき（経済と表記）」「あなたや家族の誰かが病気で、どうしても人手が必要とき（人手と表記）」「あなたが寝たきりなどで、介護を必要とするようになったとき（介護と表記）」の 4 つである⁶。

まず全体的な傾向として、頼る内容による違いはあるものの、有配偶者は配偶者に頼り、無配偶者は自分の親や兄弟姉妹に頼る傾向がある。男女別では、友人や職場の同僚、専門家やサービス機関については女性のほうが頼りにする割合が高く、離死別女性は自分の子どもに頼る傾向も見られる。男性離別者・男性未婚継続者は女性離別者や女性未婚継続者よりも誰も頼る人がいない傾向もある。

情緒面で頼りにする相手について、有配偶者は男女ともに配偶者とする割合が高く、無配偶者は自分の親やきょうだい、友人や職場の同僚と回答する割合が高い。また女性は、未婚継続者を除き自分の子どもを頼りにする割合も高い。男女の違いについては、女性はより友人や職場の同僚を頼りにし、男性無配偶者は誰もいないと回答する割合が高い。

経済面については、他の問題よりも頼りにできる相手がない様子が見られる。有配偶者は配偶者を頼る割合が男女共に高いが情緒ほど高くはなく、親に頼る割合がむしろ高い。女性では子どもを頼る割合は情緒より低い。誰もいないについては、情緒面と同様に男性の無配偶者の割合が高くなっている。

⁵ 表外の表記は、*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$, n.s.は not significant を表す。

⁶ 頼りにする相手については問 51 を使用している。

表 3 配偶関係と頼れる相手

問題を抱えて、落ち込んだり、混乱したとき

	配偶者	自分の親	自分の兄弟姉妹	自分の子ども	配偶者の親	配偶者の兄弟姉妹	子どもの配偶者	その他の親族	友人や職場の同僚	近所の人	専門家やサービス機関	誰もいない	合計
初婚継続有配偶(N=768)	86.6%	16.4%	15.5%	18.8%	4.4%	2.9%	0.9%	2.5%	25.7%	2.0%	5.5%	4.0%	100.0%
再婚有配偶(N=51)	82.4%	9.8%	17.6%	11.8%	2.0%	0.0%	2.0%	2.0%	15.7%	0.0%	11.8%	7.8%	100.0%
離別後無配偶(N=69)	0.0%	31.9%	31.9%	10.1%	0.0%	0.0%	0.0%	5.8%	33.3%	1.4%	7.2%	17.4%	100.0%
死別後無配偶(N=11)	0.0%	9.1%	36.4%	18.2%	0.0%	0.0%	0.0%	9.1%	18.2%	0.0%	0.0%	18.2%	100.0%
未婚継続(N=168)	0.0%	42.3%	29.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.4%	38.1%	6.5%	10.7%	17.9%	100.0%
初婚継続有配偶(N=877)	76.6%	27.0%	28.5%	44.6%	5.0%	2.7%	1.9%	1.6%	37.6%	4.0%	7.1%	1.8%	100.0%
再婚有配偶(N=50)	88.0%	22.0%	18.0%	40.0%	0.0%	2.0%	0.0%	2.0%	44.0%	4.0%	8.0%	2.0%	100.0%
離別後無配偶(N=114)	0.0%	28.9%	25.4%	53.5%	0.0%	0.0%	0.9%	7.0%	43.9%	5.3%	10.5%	8.8%	100.0%
死別後無配偶(N=67)	0.0%	1.5%	37.3%	79.1%	1.5%	6.0%	4.5%	7.5%	35.8%	7.5%	4.5%	3.0%	100.0%
未婚継続(N=94)	0.0%	36.2%	35.1%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	9.6%	67.0%	2.1%	11.7%	6.4%	100.0%
男性	***	***	***	***	*	n.s.	n.s.	n.s.	**	*	n.s.	***	
女性	***	***	↑	***	*	n.s.	n.s.	***	***	n.s.	n.s.	**	

急いでお金を借りなければならないとき

	配偶者	自分の親	自分の兄弟姉妹	自分の子ども	配偶者の親	配偶者の兄弟姉妹	子どもの配偶者	その他の親族	友人や職場の同僚	近所の人	専門家やサービス機関	誰もいない	合計
初婚継続有配偶(N=760)	62.4%	30.0%	13.2%	15.0%	7.0%	2.6%	0.5%	1.3%	3.3%	—	11.6%	5.7%	100.0%
再婚有配偶(N=50)	54.0%	14.0%	14.0%	6.0%	2.0%	2.0%	0.0%	2.0%	6.0%	—	16.0%	18.0%	100.0%
離別後無配偶(N=68)	0.0%	27.9%	29.4%	7.4%	0.0%	0.0%	0.0%	5.9%	10.3%	—	19.1%	22.1%	100.0%
死別後無配偶(N=11)	0.0%	18.2%	18.2%	9.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	—	18.2%	36.4%	100.0%
未婚継続(N=168)	0.0%	44.6%	28.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.0%	10.7%	—	15.5%	22.0%	100.0%
初婚継続有配偶(N=864)	62.4%	27.0%	14.4%	19.8%	8.0%	1.6%	0.7%	1.3%	1.0%	—	7.3%	5.7%	100.0%
再婚有配偶(N=50)	72.0%	20.0%	6.0%	16.0%	8.0%	0.0%	0.0%	2.0%	2.0%	—	6.0%	8.0%	100.0%
離別後無配偶(N=111)	0.0%	36.0%	23.4%	27.9%	0.0%	0.9%	0.0%	1.8%	4.5%	—	13.5%	18.0%	100.0%
死別後無配偶(N=64)	0.0%	9.4%	21.9%	64.1%	1.6%	1.6%	3.1%	0.0%	1.6%	—	7.8%	14.1%	100.0%
未婚継続(N=94)	0.0%	53.2%	25.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	7.4%	9.6%	—	10.6%	19.1%	100.0%
男性	***	***	***	***	**	n.s.	***	n.s.	**		n.s.	***	
女性	***	***	***	***	**	n.s.	n.s.	**	***		n.s.	***	

あなたや家族の誰かが病気や事故で、どうしても人手が必要なとき

	配偶者	自分の親	自分の兄弟姉妹	自分の子ども	配偶者の親	配偶者の兄弟姉妹	子どもの配偶者	その他の親族	友人や職場の同僚	近所の人	専門家やサービス機関	誰もいない	合計
初婚継続有配偶(N=770)	73.8%	24.5%	25.2%	36.8%	18.6%	12.6%	3.0%	4.7%	5.1%	3.0%	13.4%	2.3%	100.0%
再婚有配偶(N=50)	70.0%	22.0%	28.0%	24.0%	16.0%	12.0%	0.0%	0.0%	4.0%	2.0%	20.0%	4.0%	100.0%
離別後無配偶(N=69)	0.0%	24.6%	46.4%	18.8%	0.0%	1.4%	0.0%	11.6%	10.1%	0.0%	8.7%	10.1%	100.0%
死別後無配偶(N=11)	0.0%	0.0%	36.4%	27.3%	0.0%	0.0%	0.0%	9.1%	0.0%	0.0%	27.3%	0.0%	100.0%
未婚継続(N=168)	0.0%	34.5%	48.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	16.1%	10.1%	1.8%	19.6%	14.3%	100.0%
初婚継続有配偶(N=879)	66.3%	25.5%	28.9%	53.6%	11.0%	8.2%	4.3%	3.3%	6.6%	2.5%	16.7%	1.8%	100.0%
再婚有配偶(N=50)	76.0%	26.0%	16.0%	50.0%	12.0%	6.0%	0.0%	2.0%	6.0%	4.0%	14.0%	0.0%	100.0%
離別後無配偶(N=113)	0.0%	21.2%	31.9%	46.9%	0.0%	0.9%	4.4%	12.4%	8.8%	5.3%	15.9%	9.7%	100.0%
死別後無配偶(N=67)	0.0%	1.5%	31.3%	70.1%	3.0%	6.0%	10.4%	4.5%	6.0%	4.5%	26.9%	4.5%	100.0%
未婚継続(N=95)	0.0%	35.8%	63.2%	2.1%	0.0%	0.0%	0.0%	16.8%	22.1%	3.2%	21.1%	9.5%	100.0%
男性	***	*	***	***	***	***	n.s.	***	↑	n.s.	↑	***	
女性	***	***	***	***	***	***	*	***	***	n.s.	n.s.	***	

あなたが寝たきりなどで、介護を必要とするようになったとき

	配偶者	自分の親	自分の兄弟姉妹	自分の子ども	配偶者の親	配偶者の兄弟姉妹	子どもの配偶者	その他の親族	友人や職場の同僚	近所の人	専門家やサービス機関	誰もいない	合計
初婚継続有配偶(N=769)	87.4%	11.8%	7.7%	32.6%	3.9%	1.8%	1.6%	1.0%	0.8%	0.8%	30.7%	1.7%	100.0%
再婚有配偶(N=51)	82.4%	3.9%	7.8%	19.6%	2.0%	2.0%	2.0%	0.0%	0.0%	0.0%	25.5%	5.9%	100.0%
離別後無配偶(N=68)	0.0%	17.6%	17.6%	20.6%	0.0%	1.5%	0.0%	1.5%	5.9%	0.0%	33.8%	20.6%	100.0%
死別後無配偶(N=11)	0.0%	0.0%	18.2%	36.4%	0.0%	0.0%	0.0%	9.1%	0.0%	0.0%	45.5%	0.0%	100.0%
未婚継続(N=165)	0.0%	35.2%	32.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	6.7%	4.8%	0.6%	31.5%	24.2%	100.0%
初婚継続有配偶(N=870)	72.5%	12.1%	11.7%	48.3%	3.9%	1.7%	2.2%	1.4%	2.1%	1.0%	42.2%	2.3%	100.0%
再婚有配偶(N=49)	81.6%	12.2%	2.0%	51.0%	2.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	38.8%	0.0%	100.0%
離別後無配偶(N=114)	0.0%	14.0%	17.5%	52.6%	0.0%	0.9%	2.6%	2.6%	3.5%	0.0%	43.0%	11.4%	100.0%
死別後無配偶(N=69)	0.0%	0.0%	13.2%	52.9%	0.0%	0.0%	5.9%	1.5%	1.5%	1.5%	57.4%	2.9%	100.0%
未婚継続(N=95)	0.0%	31.6%	37.9%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	6.3%	10.5%	1.1%	47.4%	17.9%	100.0%
男性	***	***	***	***	↑	n.s.	n.s.	***	**	n.s.	n.s.	***	
女性	***	***	***	***	*	n.s.	n.s.	*	***	n.s.	n.s.	***	

人手の面についても、有配偶者は配偶者に頼るが、自分の親、兄弟姉妹、子どもに頼る割合も高い。経済に比べて頼れる先が広がる様子が見て取れる。無配偶者は自分の兄弟姉妹が

高いが、専門家やサービス機関も高く、未婚継続女性は友人や職場の同僚の割合も高くなっている。

介護面でも、有配偶者は配偶者や自分の子どもを頼りにする割合が高く、無配偶者は自分の兄弟姉妹や自分の親を頼りにしている。無配偶者であっても離死別の場合は男女ともに子どもを答える割合も高い。一方で、情緒・経済・人手に比べて専門家やサービス機関を頼る割合が男女とも高い。また未婚継続男性は誰もいない割合が大きい。

4.3 配偶関係と他者との交流頻度

表4は配偶関係と他者との交流頻度の関係を分析した結果である。交流頻度については、「近隣の人々」「趣味でできた知り合い」「仕事でできた知り合い」「インターネット上の知り合い」「学生時代の友人」「全体的な人間関係（家族・親族は除く）」「家族・親族との関係全体」について4件法で尋ねている⁷。

まず、インターネット上の知り合いを除き、いずれの相手との交流においても、女性は男性よりもより多く交流している。以下は、配偶関係に着目しながら交流相手別に詳細を見てゆく。「近隣の人々」については、初婚を継続している有配偶者や女性の死別無配偶者で交流が行われている一方、離別者や未婚継続者はあまり交流をしていない。近所づきあいは典型的な世帯においてより行われやすいようである。死別後無配偶者も、配偶者が生存していた際に築かれたつながりが継続しているのだろう。

「趣味でできた知り合い」については男性では配偶関係との関係はなく、女性は離別者の交流頻度が低い様子が見られる。女性の離別者では、自らが生計を維持しなくてはならないなどの事情により時間的にも経済的にもゆとりがないのかもしれない。「仕事でできた知り合い」では、男性で未婚継続者、女性で死別後無配偶者の交流頻度がやや低い。男性未婚継続者については有配偶者よりも非正規職の割合が高いこと、女性の死別後無配偶者の就業率は半数以下で非正規雇用率が高いことが影響している可能性が考えられる⁸。

「インターネット上の知り合い」との交流は他の交流に比べて頻度は低く、男女ともに有意な差異はない。「学生時代の友人」については、男性で有配偶者、女性では未婚継続者の交流が多い。未婚者において、女性は男性よりも、友人や先に見たように仕事上でできた知り合いとの交流がより多く行われている。

「全体的な人間関係（家族・親族は除く）」は男女ともに無配偶者の交流が有配偶者に比べて少なく、男性無配偶者は「家族・親族との関係全体」においても交流が少ない。女性も「家族・親族との関係全体」について有配偶者のほうがより交流が行われているが、男性ほ

⁷ 他者との交流頻度については問53を使用している。

⁸ 男性未婚継続者の非正規割合は20.8%（男性初婚継続有配偶者は15.8%）である。女性死別後無配偶者の就業率は約44%で非正規割合は53.8%（女性未婚継続者の就業率は約74%、非正規割合26.0%）である。

ど配偶関係による違いは大きくない。

表 4 配偶関係と他者との交流頻度

近隣の人々		趣味でできた知り合い								
		ほとんど・まったく交 えている 流している していない 流していな い				ほとんど・まったく交 えている 流している していない 流していな い				
男性	初婚継続有配偶 (N=774)	7.2%	39.9%	32.7%	20.2%	初婚継続有配偶 (N=766)	10.4%	34.3%	21.8%	33.4%
	再婚有配偶 (N=51)	4.1%	30.6%	42.9%	22.4%	再婚有配偶 (N=48)	12.5%	31.3%	25.0%	31.3%
	離別後無配偶 (N=69)	2.9%	36.2%	31.9%	29.0%	離別後無配偶 (N=70)	8.6%	38.6%	15.7%	37.1%
	死別後無配偶 (N=11)	0.0%	54.5%	27.3%	18.2%	死別後無配偶 (N=11)	0.0%	27.3%	36.4%	36.4%
	未婚継続 (N=166)	4.8%	19.3%	30.7%	45.2%	未婚継続 (N=166)	10.2%	24.7%	21.1%	44.0%
女性	初婚継続有配偶 (N=875)	11.2%	46.1%	29.6%	13.1%	初婚継続有配偶 (N=861)	13.2%	29.6%	20.1%	37.0%
	再婚有配偶 (N=50)	2.0%	48.0%	30.0%	20.0%	再婚有配偶 (N=49)	10.2%	34.7%	20.4%	34.7%
	離別後無配偶 (N=111)	5.4%	29.7%	32.4%	32.4%	離別後無配偶 (N=107)	6.5%	21.5%	17.8%	54.2%
	死別後無配偶 (N=70)	18.6%	42.9%	24.3%	14.3%	死別後無配偶 (N=70)	21.4%	44.3%	14.3%	20.0%
	未婚継続 (N=97)	0.0%	24.7%	38.1%	37.1%	未婚継続 (N=94)	13.8%	22.3%	12.8%	51.1%

男性: $\chi^2=58.8(12)$, $p<.001$ 女性: $\chi^2=85.7(12)$, $p<.001$ 男性: $\chi^2=13.4(12)$, $n.s.$ 女性: $\chi^2=38.6(12)$, $p<.001$

仕事でできた知り合い		インターネット上の知り合い								
		ほとんど・まったく交 えている 流している していない 流していな い				ほとんど・まったく交 えている 流している していない 流していな い				
男性	初婚継続有配偶 (N=773)	13.3%	51.2%	21.9%	13.6%	初婚継続有配偶 (N=754)	1.2%	2.5%	9.3%	87.0%
	再婚有配偶 (N=49)	8.2%	59.2%	24.5%	8.2%	再婚有配偶 (N=49)	0.0%	4.1%	12.2%	83.7%
	離別後無配偶 (N=69)	11.6%	58.0%	18.8%	11.6%	離別後無配偶 (N=70)	4.3%	2.9%	11.4%	81.4%
	死別後無配偶 (N=11)	0.0%	45.5%	36.4%	18.2%	死別後無配偶 (N=11)	0.0%	0.0%	9.1%	90.9%
	未婚継続 (N=168)	9.5%	36.3%	22.0%	32.1%	未婚継続 (N=160)	1.9%	6.9%	12.5%	78.8%
女性	初婚継続有配偶 (N=867)	16.3%	46.9%	20.0%	16.8%	初婚継続有配偶 (N=838)	1.0%	3.0%	4.1%	92.0%
	再婚有配偶 (N=50)	12.0%	52.0%	26.0%	10.0%	再婚有配偶 (N=47)	2.1%	4.3%	12.8%	80.9%
	離別後無配偶 (N=111)	20.7%	51.4%	18.0%	9.9%	離別後無配偶 (N=109)	1.8%	4.6%	4.6%	89.0%
	死別後無配偶 (N=68)	7.4%	60.3%	13.2%	19.1%	死別後無配偶 (N=62)	0.0%	1.6%	4.8%	93.5%
	未婚継続 (N=95)	23.2%	45.3%	20.0%	11.6%	未婚継続 (N=95)	2.1%	7.4%	3.2%	87.4%

男性: $\chi^2=46.2(12)$, $p<.001$ 女性: $\chi^2=19.0(12)$, $p<.10$ 男性: $\chi^2=16.5(12)$, $n.s.$ 女性: $\chi^2=17.3(12)$, $n.s.$

学生時代の友人		全体的な人間関係								
		ほとんど・まったく交 えている 流している していない 流していな い				ほとんど・まったく交 えている 流している していない 流していな い				
男性	初婚継続有配偶 (N=772)	9.3%	34.8%	30.2%	25.6%	初婚継続有配偶 (N=772)	6.0%	50.6%	30.6%	12.8%
	再婚有配偶 (N=49)	8.2%	46.9%	20.4%	24.5%	再婚有配偶 (N=48)	6.3%	52.1%	27.1%	14.6%
	離別後無配偶 (N=70)	5.7%	34.3%	30.0%	30.0%	離別後無配偶 (N=69)	2.9%	56.5%	24.6%	15.9%
	死別後無配偶 (N=11)	0.0%	18.2%	18.2%	63.6%	死別後無配偶 (N=11)	0.0%	36.4%	18.2%	45.5%
	未婚継続 (N=166)	9.6%	23.5%	26.5%	40.4%	未婚継続 (N=160)	3.1%	33.1%	38.8%	25.0%
女性	初婚継続有配偶 (N=869)	11.5%	40.4%	27.5%	20.6%	初婚継続有配偶 (N=866)	10.2%	57.2%	24.7%	8.0%
	再婚有配偶 (N=49)	6.1%	36.7%	32.7%	24.5%	再婚有配偶 (N=49)	2.0%	46.9%	36.7%	14.3%
	離別後無配偶 (N=113)	15.0%	30.1%	21.2%	33.6%	離別後無配偶 (N=111)	9.0%	45.9%	28.8%	16.2%
	死別後無配偶 (N=71)	9.9%	45.1%	19.7%	25.4%	死別後無配偶 (N=70)	18.6%	55.7%	18.6%	7.1%
	未婚継続 (N=95)	23.2%	40.0%	14.7%	22.1%	未婚継続 (N=96)	6.3%	47.9%	33.3%	12.5%

男性: $\chi^2=28.8(12)$, $p<.01$ 女性: $\chi^2=31.6(12)$, $p<.01$ 男性: $\chi^2=37.8(12)$, $p<.001$ 女性: $\chi^2=30.3(12)$, $p<.01$

家族・親族との関係全体		ほとんど・まったく交 えている 流している していない 流していな い			
		初婚継続有配偶 (N=776)	28.0%	56.6%	12.8%
男性	再婚有配偶 (N=50)	20.0%	62.0%	16.0%	2.0%
	離別後無配偶 (N=70)	8.6%	51.4%	30.0%	10.0%
	死別後無配偶 (N=167)	18.2%	54.5%	9.1%	18.2%
	未婚継続 (N=160)	15.0%	41.9%	30.5%	12.6%
	初婚継続有配偶 (N=866)	33.4%	57.5%	7.3%	1.8%
女性	再婚有配偶 (N=49)	30.0%	52.0%	18.0%	0.0%
	離別後無配偶 (N=111)	38.6%	39.5%	19.3%	2.6%
	死別後無配偶 (N=70)	32.9%	58.6%	5.7%	2.9%
	未婚継続 (N=96)	24.7%	55.7%	15.5%	4.1%

男性: $\chi^2=94.8(12)$, $p<.001$ 女性: $\chi^2=37.8(12)$, $p<.001$

4.4 頼りにする相手と孤独感

これまでの分析では配偶関係と孤独感、孤立、他者との交流頻度との関わりを見てきた。次に、頼りにする相手がいないこと、すなわち孤立と孤独感に関係はあるのかについて、分析結果を表5に示す⁹。頼りにする相手は表3と同様に、情緒面、経済面、人手面、介護面の4つの状況である。分析の結果、男女ともに「頼れる人が誰もいない」ことは4つの状況のいずれにおいても孤独感と関連することが確認できる。また、介護面は他の状況に比べて、特に頼りにする相手の有無による孤独感の違いが大きくなっているようである。

表5 頼りにする相手と孤独感

		問題を抱えて、落ち込んだり、混乱したとき				急いでお金を借りなければならないとき			
		何度もあった	ときどきあった	ごくまれにあった	まったくなかった	何度もあった	ときどきあった	ごくまれにあった	まったくなかった
男性	いる(N=1017)	4.5%	8.9%	19.5%	67.1%	4.6%	8.4%	19.6%	67.4%
	誰もいない(N=77)	19.5%	18.2%	19.5%	42.9%	13.9%	21.3%	19.4%	45.4%
女性	いる(N=1193)	4.8%	11.3%	15.8%	68.1%	4.4%	10.7%	15.3%	69.6%
	誰もいない(N=38)	21.1%	10.5%	10.5%	57.9%	15.7%	17.6%	20.6%	46.1%
男性： $\chi^2=41.5(3)$, $p<.001$ 女性： $\chi^2=19.7(3)$, $p<.001$					男性： $\chi^2=39.1(3)$, $p<.001$ 女性： $\chi^2=35.2(3)$, $p<.001$				
		あなたや家族の誰かが病気や事故で、どうしても人手が必要な時				あなたが寝たきりなどで、介護を必要とするようになったとき			
		何度もあった	ときどきあった	ごくまれにあった	まったくなかった	何度もあった	ときどきあった	ごくまれにあった	まったくなかった
男性	いる(N=1050)	5.0%	9.0%	19.5%	66.5%	4.1%	9.0%	19.1%	67.8%
	誰もいない(N=47)	19.1%	19.1%	17.0%	44.7%	27.5%	17.4%	24.6%	30.4%
女性	いる(N=1192)	4.9%	11.1%	15.3%	68.8%	4.5%	10.6%	15.4%	69.5%
	誰もいない(N=40)	17.5%	15.0%	22.5%	45.0%	23.1%	21.2%	23.1%	32.7%
男性： $\chi^2=24.6(3)$, $p<.001$ 女性： $\chi^2=16.8(3)$, $p<.01$					男性： $\chi^2=83.2(3)$, $p<.001$ 女性： $\chi^2=49.1(3)$, $p<.001$				

4.5 介護が必要な家族と孤独感

他者との交流や頼りにする相手など、対象者が主体的に持つ他者とのつながりを検討してきたが、ここでは逆に受動的な他者とのつながり（制約）から孤独感との関わりを検討する。具体的には介護経験を取り上げる。

介護経験について、「現在、家族内に介護が必要な家族がいること」「現在、対象者自身が主介護者であること」「かつて、対象者自身が主介護者であったこと」の3点を見る¹⁰。表6に結果を示す。

⁹ 紙幅の関係で掲載していないが、いずれの種類の手他者との交流頻度も高いほど孤独感が低いという関連が見られた。

¹⁰ 介護経験については、問38「現在、あなたの家族には、長期にわたる心身の病気・障がいや高齢のために介護（ケア）が必要な方はいますか（別々に暮らしている方も含めます）」、問39「そのなかで、現在、あなたが中心になって介護（ケア）されている方はいますか」、問40「かつて、あなた自身が中心になって、家族のどなたかの介護（ケア）を3か月以上したことはありますか。現在も介護を続けている方は除いてください」を使用した。いずれの問も、1いる、2いないで尋ねている。

介護経験については、いずれも男性においては孤独感との関係が見られない。一方女性では、要介護者が家族に居ること、主介護者として介護に従事すること、かつての主介護者としての介護経験いずれもが孤独感を高める方向に関連している様子が確認できる。近年介護者は多様化しつつあるが、依然として介護役割を担うのは主に女性であり、介護によって他者と交流や社会生活の制限を受けることが孤独感と関わる可能性がある。

表 6 介護経験と孤独感

介護が必要な家族の有無				主介護者として介護している家族の有無							
		何度もあった	ときどきあった	ごくまれにあった	まったくなかった		何度もあった	ときどきあった	ごくまれにあった	まったくなかった	
男性	いない(N=873)	5.2%	9.7%	19.2%	65.9%	男性	いない(N=103)	5.0%	9.2%	19.5%	66.2%
	いる(N=235)	6.0%	9.4%	19.1%	65.5%		いる(N=79)	8.9%	15.2%	16.5%	59.5%
女性	いない(N=923)	4.2%	10.0%	15.3%	70.5%	女性	いない(N=108)	4.5%	10.3%	15.4%	69.8%
	いる(N=327)	8.3%	14.4%	17.1%	60.2%		いる(N=162)	9.9%	16.7%	17.9%	55.6%

男性： $\chi^2=255(3)$, *n.s.* 女性： $\chi^2=15.9(3)$, $p<.001$ 男性： $\chi^2=5.6(3)$, *n.s.* 女性： $\chi^2=17.6(3)$, $p<.01$

かつて主介護者として介護していた家族の有無					
		何度もあった	ときどきあった	ごくまれにあった	まったくなかった
男性	いない(N=935)	4.9%	9.8%	19.5%	65.8%
	いる(N=155)	6.5%	7.7%	19.4%	66.5%
女性	いない(N=868)	4.3%	10.1%	16.1%	69.5%
	いる(N=342)	7.0%	14.4%	17.1%	60.2%

男性： $\chi^2=1.2(3)$, *n.s.* 女性： $\chi^2=8.3(3)$, $p<.05$

4.6 孤独感の規定要因

4.6.1 全体の分析結果

最後の分析では、これまでの分析結果を踏まえて多変量解析によって孤独感の規定要因をみてゆく。まずはすべてのサンプルを対象にしたモデルを検討する。

独立変数は、年代（40代ダミー、60代ダミー、70代ダミー<参照カテゴリーは50代ダミー>）、男性ダミー、教育年数（学歴を教育年数に置き換えた変数を使用）、就業ダミー（現在、収入をとまなう仕事についている・ついていないが休職中を統合したもの）、本人収入（収入を尋ねた12カテゴリーそれぞれを中央値に置き換えたもの。最大値の121400万円以上は1400にリコードした）、配偶関係（有配偶ダミー・死別ダミー・未婚ダミー<参照カテゴリーは離別>）、単独世帯ダミー、健康状態（あなたのこの1年間の健康状態は、おおむね、いかがでしたかを「1大変良好」から「5大変悪い」の5件法で尋ねたものを点数が高いほど良好になるように反転させた）、子どもありダミー、親の配偶状態（両親健在ダミー、父親のみ健在ダミー、母親のみ健在ダミー<参照カテゴリーは両親ともいないダミー>）、きょうだいありダミー、介護の必要な家族ありダミー、交流（近隣の人々、趣味でできた知り合い、仕事でできた知り合い、インターネット上の知り合い、学生時代の友人、全体的な人間関係（家族・親族は除く）、家族・親族との関係全体について、「1よく交流している」から「4ほとんど・まったく交流していない」の4件法で尋ねたものを値が高くなるほど交流頻

度が高くなるように反転させた)、頼れる相手ダミー (落ち込み・混乱、お金を借りる、人手が必要、自身の介護について頼れる相手が誰もいない=1 とするダミー変数) である。

記述統計は表 7 に示す。

表 7 使用変数の記述統計

	全体(N=2418)				男性(N=1144)				女性(N=1274)			
	平均値	標準偏差	最小値	最大値	平均値	標準偏差	最小値	最大値	平均値	標準偏差	最小値	最大値
40代(Ref:50代)	0.32	0.47	0.00	1.00	0.32	0.47	0.00	1.00	0.33	0.47	0.00	1.00
60代	0.28	0.45	0.00	1.00	0.28	0.45	0.00	1.00	0.28	0.45	0.00	1.00
70代	0.11	0.32	0.00	1.00	0.12	0.32	0.00	1.00	0.11	0.32	0.00	1.00
男性ダミー	0.47	0.50	0.00	1.00	—	—	—	—	—	—	—	—
教育年数	13.39	2.07	9.00	18.00	13.70	2.27	9.00	18.00	13.11	1.83	9.00	18.00
就業ダミー	0.75	0.44	0.00	1.00	0.84	0.37	0.00	1.00	0.66	0.47	0.00	1.00
本人収入	327.38	298.68	0.00	1400.00	483.36	314.11	0.00	1400.00	184.66	194.87	0.00	1400.00
有配偶(Ref:離別)	0.78	0.42	0.00	1.00	0.78	0.42	0.00	1.00	0.78	0.42	0.00	1.00
死別	0.03	0.18	0.00	1.00	0.01	0.10	0.00	1.00	0.06	0.23	0.00	1.00
未婚	0.11	0.31	0.00	1.00	0.15	0.36	0.00	1.00	0.08	0.27	0.00	1.00
単独世帯ダミー	0.09	0.28	0.00	1.00	0.10	0.30	0.00	1.00	0.07	0.26	0.00	1.00
健康状態	3.61	0.91	1.00	5.00	3.62	0.91	1.00	5.00	3.61	0.91	1.00	5.00
子どもあり	0.82	0.38	0.00	1.00	0.77	0.42	0.00	1.00	0.86	0.34	0.00	1.00
両親健在(Ref:両親ともいない)	0.33	0.47	0.00	1.00	0.32	0.47	0.00	1.00	0.34	0.48	0.00	1.00
父のみ健在	0.04	0.21	0.00	1.00	0.05	0.22	0.00	1.00	0.04	0.20	0.00	1.00
母のみ健在	0.29	0.46	0.00	1.00	0.30	0.46	0.00	1.00	0.29	0.45	0.00	1.00
きょうだいありダミー	0.91	0.28	0.00	1.00	0.92	0.28	0.00	1.00	0.91	0.28	0.00	1.00
介護の必要な家族ありダミー	0.24	0.43	0.00	1.00	0.21	0.41	0.00	1.00	0.26	0.44	0.00	1.00
交流 近隣の人々	2.36	0.90	1.00	4.00	2.25	0.90	1.00	4.00	2.46	0.89	1.00	4.00
交流 趣味でできた知り合い	2.17	1.06	1.00	4.00	2.18	1.03	1.00	4.00	2.17	1.08	1.00	4.00
交流 仕事でできた知り合い	2.62	0.92	1.00	4.00	2.58	0.91	1.00	4.00	2.66	0.93	1.00	4.00
交流 インターネット上の知り合い	1.17	0.53	1.00	4.00	1.20	0.56	1.00	4.00	1.15	0.51	1.00	4.00
交流 学生時代の友人	2.33	0.97	1.00	4.00	2.23	0.96	1.00	4.00	2.42	0.97	1.00	4.00
交流 全体的な人間関係	2.55	0.80	1.00	4.00	2.44	0.81	1.00	4.00	2.65	0.79	1.00	4.00
交流 家族・親族との関係全体	3.09	0.74	1.00	4.00	2.98	0.77	1.00	4.00	3.19	0.69	1.00	4.00
頼れる相手 落ち込み、混乱	0.05	0.22	0.00	1.00	0.07	0.26	0.00	1.00	0.03	0.17	0.00	1.00
頼れる相手 お金を借りる	0.09	0.29	0.00	1.00	0.10	0.30	0.00	1.00	0.08	0.28	0.00	1.00
頼れる相手 人手が必要	0.04	0.19	0.00	1.00	0.05	0.21	0.00	1.00	0.03	0.18	0.00	1.00
頼れる相手 自身の介護	0.05	0.22	0.00	1.00	0.06	0.25	0.00	1.00	0.04	0.20	0.00	1.00

孤独感の規定要因を検討するため、表 8 に示すように 6 つのモデルを検討した。モデル 1 は基本モデルであり、属性、配偶関係、単独世帯、健康状態を投入している。モデル 2 はモデル 1 に家族構造 (子ども、親、きょうだい) を加えた。モデル 3 には、性別と配偶関係の交互作用を投入した。モデル 4 には介護の必要な家族の有無を加え、モデル 5 には他者との交流頻度を、モデル 6 には頼れる相手が誰もいない、つまり孤立の状態を検討する変数を投入している。では順に結果を見よう。係数が正の変数は孤独感を高め、負の変数は孤独感を低下させる関係にある。

モデル 1 では、70 代は 50 代に比べて孤独感が低く、有配偶、死別、未婚は離別者よりも孤独感が低いが、単独世帯であると孤独感が高く、健康状態がよいと孤独感が低くなるという結果である。先行研究では高齢期の孤独感が取り上げられることが多いが、本分析では 50 代の孤独感をもっとも高くなっている。

モデル 2 はモデル 1 と同様の結果であり、子どもや親、きょうだいについて孤独感との関連は見られない。家族がいるということだけでは孤独感に影響を及ぼさないようである。

モデル3は交互作用として男性・有配偶、男性・死別、男性・未婚を投入したモデルである。男性・有配偶者にのみ有意傾向が示されていることから、男性のほうが女性に比べて、有配偶の場合に孤独感が低下しやすいようである。

モデル4は介護経験を投入したモデルである。介護の必要な家族がいることは有意に孤独感を高め、両親が健在であることは孤独感を低下させる。40代以降の中高年期には親が高齢化し介護が必要になることもある。両親が揃っていれば子世代の介護役割は多くの場合軽減されるため自身の生活に制約を抱えることは少ないが、他の変数でコントロールしてもなお介護が必要な家族がいることは、介護によって生活上の拘束が高まり、時間や人間関係で思うに任せないことが生じることで孤独感が高まると解釈できるのではないだろうか。

他者との交流頻度を投入したモデル5では、家族・親族を除く全体的な人間関係と家族・親族との交流が多いことは孤独感を低下させることと関連していることを示している。ただし、近隣の人々や趣味・仕事・インターネット上の知り合い、友人といった具体的な他者と孤独感との関連は見られない。モデル6は、頼れる相手がいないことが孤独感と関連するかを検討するために、情緒、経済、人手、介護に関わる変数を投入している。分析の結果、自身の介護を誰にも頼れない場合には孤独感が高まるが、人手が必要なときに誰にも頼れないことは孤独感を低下させている。一般的に頼れる相手がいないことは孤独感を高めるものと予想されるが、情緒面や経済面で頼れる人がいないことは有意な関係にまで至っていない。また、人手については予想に反する結果であり解釈が困難だが、表3を見ると人手として頼る人がいない割合が相対的に低いこと、また、問が「あなたや家族の誰かが人手が必要なとき」となっているため、自身のことだけをイメージして回答していないことが関係しているのかもしれない。

孤独感の規定要因を検討したモデル1からモデル6までを見ると、有配偶者、未婚者は離別者より孤独感は低く、単独世帯であることは孤独感を高め、健康状態が良好であると孤独感は低くなるようである¹¹。また、介護の必要な家族がいることは孤独感を高めるが、家族および家族以外の他者と交流が多いと孤独感は低下する。また、人手の面で頼れる人がいないことは孤独感を低下させるが、自分の介護を頼れる相手が誰もいないことは孤独感を高めるといった結果であった。

¹¹ 有配偶者と男性の交互作用項が有意傾向になっているが、ここでは5%水準で有意な変数だけを対象として解釈を行った。

表 8 孤独感の規定要因（重回帰分析）

	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4	モデル5	モデル6
	B	B	B	B	B	B
(定数)	2.633 ***	2.760 ***	2.676 ***	2.667 ***	3.197 ***	3.024 ***
40代(Ref:50代)	-0.087 †	-0.062	-0.060	-0.040	-0.063	-0.064
60代	-0.067	-0.091	-0.080	-0.109 †	-0.103 †	-0.079
70代	-0.161 *	-0.218 **	-0.204 *	-0.222 **	-0.169 *	-0.152 †
男性ダミー	0.057	0.044	0.234 †	0.261 †	0.176	0.145
教育年数	0.001	0.003	0.003	0.003	0.009	0.009
就業ダミー	0.011	0.006	0.009	0.010	0.009	0.006
本人収入	0.000 †	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
有配偶(Ref:離別)	-0.365 ***	-0.384 ***	-0.289 **	-0.292 **	-0.235 *	-0.200 *
死別	-0.329 **	-0.391 **	-0.314 *	-0.303 *	-0.163	-0.130
未婚	-0.234 **	-0.256 *	-0.318 *	-0.292 *	-0.276 *	-0.301 *
単独世帯ダミー	0.295 ***	0.282 ***	0.261 **	0.243 *	0.211 **	0.177 *
健康状態	-0.202 ***	-0.202 ***	-0.204 ***	-0.202 ***	-0.182 ***	-0.182 ***
子どもあり		-0.011	-0.005	-0.001	0.044	0.058
両親健在(Ref:両親ともいない)		-0.093	-0.095	-0.147 *	-0.129 *	-0.107 †
父のみ健在		-0.052	-0.049	-0.107	-0.096	-0.083
母のみ健在		-0.041	-0.040	-0.087	-0.073	-0.066
きょうだいありダミー		-0.083	-0.085	-0.090	-0.072	-0.068
男性*有配偶			-0.256 †	-0.278 †	-0.267 †	-0.241 †
男性*死別			-0.222	-0.225	-0.384	-0.368
男性*未婚			0.031	-0.007	0.008	0.019
介護の必要な家族ありダミー				0.158 ***	0.156 **	0.135 **
交流 近隣の人々					-0.015	-0.016
交流 趣味でできた知り合い					-0.013	-0.008
交流 仕事でできた知り合い					0.027	0.031
交流 インターネット上の知り合い					0.061 †	0.050
交流 学生時代の友人					-0.036	-0.037 †
交流 全体的な人間関係					-0.070 *	-0.062 *
交流 家族・親族との関係全体					-0.189 ***	-0.167 ***
頼れる相手 落ち込み、混乱						0.104
頼れる相手 お金を借りる						0.117
頼れる相手 人手が必要						-0.266 *
頼れる相手 自身の介護						0.548 ***
調整済みR2乗	0.082	0.084	0.086	0.090	0.129	0.147
サンプルサイズ	2185	2124	2124	2118	2005	1963

† p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

4.6.2 サンプルを分割した分析結果

次に4.6.1のモデル6を使用し、男性のみ、女性のみ、無配偶者のみを対象とした分析を行い、孤独感の規定要因の違いを検討する。分析結果は表9の通りである。まず、男性のみを対象にしたモデルでは、有配偶者・未婚は離別者よりも孤独感が低く、健康状態が良好なほど、家族・親族との交流が多いほど孤独感は低いが、自身の介護を頼れる相手がいないことは孤独感を高めている。

女性モデルについては、男性と同様に健康状態が良好で家族・親族との交流が多いことは孤独感を低下させ、自分の介護を頼れる相手がいないと孤独感が高い。女性独自の関連としては、介護の必要な家族があることが孤独感を高めるが、学生時代の友人との交流は孤独感を低下させ、お金を借りられる相手がいないことは孤独感を高めている。

男女の分析結果を比較すると、男女双方に家族との交流は孤独感を低下させることに加えて、女性は家族以外の知り合いとの交流も孤独感を低下させる効果があるようである。また、女性は男性のように配偶関係と孤独感の明確な関連が見られない。むしろ女性は介護役割を担うことによって、恐らく他者や社会とのつながりをなくしやすくそのことが孤独感を高めてしまうようだ。さらに女性では配偶関係を統制しても経済面で頼れる人がいないことは孤独感を高めている。男性に比べて稼働力の低い女性では、いざというときに経済的に依存できる相手がいないことで孤独を感じやすくなっている。

無配偶者モデルにおける孤独感、男性モデル・女性モデルに共通して健康状態と自身の介護を頼れる相手がいないこととの関連が強い。無配偶者独自の要因としては、母親のみ健在なこと、近隣の人々と交流が多いと孤独感が低下することである。母親の配偶状態については、母が一人であることによって、母親と無配偶の子の双方がより積極的に交流を持つようになり、結果として孤独感を低下させるのではないだろうか。また、近隣の人々との交流頻度がそもそも低い水準にある無配偶者にとって、家族以外の身近な他者として近隣の人々の存在が重要な役割を果たしている可能性を示唆することができる。ただし、他者との交流については、孤独だからこそ交流をもとめるという関係にあることにも留意する必要があるだろう。

表 9 孤独感の規定要因：男性モデル・女性モデル・無配偶モデル

	男性モデル	女性モデル	無配偶者モデル
	B	B	B
(定数)	3.189 ***	2.814 ***	4.036 ***
40代(Ref:50代)	-0.067	-0.087	-0.177
60代	-0.008	-0.148 †	-0.191
70代	-0.093	-0.200 †	-0.413 †
男性ダミー	—	—	0.196 †
教育年数	0.000	0.023	-0.013
就業ダミー	0.040	-0.056	0.010
本人収入	0.000	0.000	0.000
有配偶(Ref:離別)	-0.408 **	-0.170 †	—
死別	-0.466 †	-0.060	-0.162
未婚	-0.300 *	-0.246	-0.305
単独世帯ダミー	0.214 †	0.145	0.078
健康状態	-0.166 ***	-0.185 ***	-0.254 **
子どもあり	-0.014	0.145	0.023
両親健在(Ref:両親ともいない)	-0.089	-0.093	-0.282
父のみ健在	-0.020	-0.117	-0.106
母のみ健在	-0.024	-0.079	-0.316 *
きょうだいありダミー	0.003	-0.123	-0.216
介護の必要な家族ありダミー	0.080	0.175 **	0.184
交流 近隣の人々	0.005	-0.041	-0.129 *
交流 趣味でできた知り合い	0.010	-0.020	-0.005
交流 仕事でできた知り合い	-0.004	0.057 †	0.061
交流 インターネット上の知り合い	0.032	0.058	-0.048
交流 学生時代の友人	-0.004	-0.062 *	-0.059
交流 全体的な人間関係	-0.019	-0.098 *	-0.079
交流 家族・親族との関係全体	-0.227 ***	-0.113 **	-0.067
頼れる相手 落ち込み、混乱	0.131	0.130	-0.042
頼れる相手 お金を借りる	-0.030	0.254 *	-0.032
頼れる相手 人手が必要	-0.216	-0.327	-0.099
頼れる相手 自身の介護	0.492 **	0.686 ***	0.600 ***
調整済みR2乗	0.166	0.131	0.152
サンプルサイズ	944	1019	431

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

6. 結論と考察

本稿は、ライフコースの多様化が進行する社会環境において無配偶者や単身世帯者など配偶者や家族との関係を持ちにくい人々が増加し、そのような人々の孤立や孤独が問題視されていることを背景に、配偶関係による孤独感や孤立状況の違いを検討した上で、孤独感を規定する要因を明らかにすることを目的に行ったものである。配偶関係についてはライフコースの観点を取り入れて5つのカテゴリー（初婚継続有配偶、再婚有配偶、離別後無配偶、死別後無配偶、未婚継続）に分類して検討した。分析の結果のまとめと考察は以下の通りである。

①孤独感：孤独をより強く感じているのは、男女ともに離別者である。ただし、配偶関係と孤独感の関連の強さは男性でより顕著に表れ、有配偶男性の孤独感が特に低い。女性も離別者の孤独感が高いが、配偶関係間の違いは相対的に小さい。男性で離別者の孤独感が高いのは、ネガティブなライフイベントを経験していることや、配偶者のいる状態といない状態の比較によって配偶者を失った喪失感をより大きく感じやすいためと推察される。

同様に女性の離別者も孤独感が高いが、女性の場合は家族や家族以外に頼れる相手がより多く、他者との交流をより多く行っているために男性ほどの孤独を感じていないものと考えられる。

②孤独感を規定する要因：配偶関係に加えて単身世帯であること、健康状態が良好でないほど孤独感を高める。配偶関係や単身世帯については、身近に頼れる相手がいなかったり、家族との交流が少なくなりやすい構造による影響を示しているのであろう。健康状態については多くの先行研究と整合的である。また、介護の必要な家族がいることは孤独感を高め、その影響が女性に見られることも明らかとなったが、これは介護役割を担うことによって、他者との交流や社会参加に制約を受けるためと考えられる。

孤立については、落ち込みや混乱時、経済的なニーズ、人手が欲しいときに頼れる人がいないことよりも、介護を受ける必要が生じた場合に頼れる人がいないことが孤独感と強く関わっていた。介護は相談相手や経済、人手よりも気軽に頼ったり応じたりすることができにくい行為である。そのような深く長期的なコミットメントが求められる行為について頼れる人がいないということは、身近に強い信頼を寄せられる他者がいないことの表れと解釈でき、孤独感を高めているものと推察される。

孤独感は個人が抱く主観的な感情であり、持続的に保有されるものか否かは研究を積み重ねていかななくてはならない。しかし、本稿の分析からは、配偶関係、単身世帯、家族や家族以外の他者との交流や援助関係、介護役割など、家族や世帯構造、ネットワーク、家庭内役割のあり方が孤独感と関連すること、また社会的孤立が孤独感と関係することが明らかになった。家族形成をしない、あるいはできない人々、家族を形成しても途上で解体せざるを得ない人々、解体後に新たな家族を再形成する人々など、現代日本人のライフコースはさまざまであり、時代とともに変容してゆく。そのような変容を注視しながら、孤独感が家族

内外の関係性や構造とどのようにかかわるのか、継続的な研究を行う必要がある。

[備考]

NFRJ18 の調査概要の詳細については、第一次報告書を参照されたい。

(<https://nfrj.org/nfrj18publishing.htm>)

[文献]

- Cacioppo, J. & P. William, 2008, *Loneliness: Human Nature and the Need for Social Connection*, Massachusetts: The Gramond Agency. (=2010, 柴田裕之訳『孤独の科学——人はなぜ寂しくなるのか』河出書房新社.)
- De Jong Gierveld, J., T. G. van Tilburg, & P. A. Dykstra, 2006, “Loneliness and Social Isolation,” Perlman, D. & A. Vangelisti, eds., *The Cambridge Handbook of Personal Relationships*, Cambridge, UK: Cambridge University Press, 485-500.
- Dykstara, P. A., T. G. Van Tilburg, & J. De Jong Gierveld, 2005, “Changes in Older Adult Loneliness: Result from a Seven-year Longitudinal Study,” *Research on Aging*, 27:725-747.
- Hawkey, L. C., M. E. Hughes, L. J. Waite, C. M. Masi, R. A. Thisted, & J. T. Cacioppo, 2008, “From Social Structural Factors to Perceptions of Relationship Quality and Loneliness: the Chicago Health, Aging, and Social Relation Study,” *Journal of Gerontology, SOCIAL SCIENCES*, 63B: S375-384.
- 松田茂樹, 2008, 『何が育児を支えるのか——中庸なネットワークの強さ』勁草書房。
- Perlman, D. & L. A. Peplau, 1981, “Toward a Social Psychology of Loneliness,” Gilmour, R. & S. Duck, eds, *Personal Relationship 3: Personal Relationships in Disorder*,” London, UK: Academic Press, 31-43.
- 下開千春, 2005, 「単身高齢者の孤独の要因と対処資源」『ライフデザインレポート』2005.9, 4-15 (<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/report/mr0509.pdf> 取得日:2021年2月1日).
- Silverstein, M. & X. Chen, 1996, “Too Much of a Good Thing? Intergenerational Social Support and the Psychological Well-being of Older Persons,” *Journal of Marriage and Family*, 58:970-982.
- Takagi, E. & Y. Saito, 2015, “Older Parents’ Loneliness and Family Relationships in Japan”, *Aging International*, 40: 353-375.
- Van Tilburg, T., 1990, “The Size of the Supportive Network in Association with the Degree of Loneliness,” Knipscheer, P. M. & T. Antonucci eds., *Social Network Research: Substantive Issues and Methodological Question*, Lisse, The Netherlands: Swets & Zeitlinger, 137-150.

Relationship between Loneliness and Marital Status in the Middle-aged and Elderly in Japan

Kaoru OKAZE

Kyoto Notre Dame University

Loneliness causes physical and psychological problems and prior mental health research suggests that the level of loneliness varies depending on marital status, however, little research has been conducted on loneliness in the family studies in Japan. The purpose of this study is to clarify the factors that determine the level of loneliness in the middle-aged and elderly focusing on the differences in their marital status. Using National Family Research of Japan 18 data, 2,324 middle-aged and elderly men and women were examined to determine how their marital status influences their level of loneliness and what factors affect their feeling of loneliness.

The result shows that divorced men and women are more likely to feel lonely compared to other groups (married, widowed, and unmarried), and divorced men feel more lonely than divorced women. Single households, poor health conditions, and less contact with families and acquaintances are associated with higher loneliness, and people who do not have family members or others to take care of them are more likely to feel lonely than those who have resources for their own long-term care.

In comparison with men, having family members who need long-term care raises the level of loneliness in women, and, women who are in contact with friends feel less lonely regardless of their marital status. Among subjects who do not have their spouses, having only mothers and frequent contact with neighbors reduces the level of loneliness. These findings advance our understanding of how marital status and social isolation affect middle-aged and elderly people's loneliness in Japan.

Keywords and phrases: loneliness, marital status, middle-aged and elderly, contact, social isolation